

ビュシュック(摇篮)育児とその再編：中国新疆ウイグルの産育文化の一側面

坂元，一光
九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座：教育人類学

アナトラ，グリジャナティ
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻博士課程：教育人類学

<https://doi.org/10.15017/15665>

出版情報：大学院教育学研究紀要．10，pp.59-78，2008-03-31．九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門

バージョン：

権利関係：



ビュシュック(揺籃)育児とその再編

—中国新疆ウイグルの産育文化の一側面—

坂 元 一 光 アナトラ・グリジャナティ

はじめに

本論は中国新疆ウイグル自治区における産育習俗とその新たな動向についての調査報告である⁽¹⁾。ここでは広範かつ長期にわたる産育習俗の記述に一定のまとまりを与えるためにひとつの産育の道具(Buxuk:ビュシュック)⁽²⁾に着目している。ビュシュックはウイグル社会の乳幼児に用いるゆりかご(揺籃)のことであり、誕生から一年あまりの期間使用される育児用具である。このビュシュックを基点として産育習俗を見てゆくことにより新疆のウイグル社会で維持される伝統的な産育実践の現状を確認するとともに急激な変化のなかにある少数民族文化の変容やエスニシティの動態に関する手がかりを探ろうと考える。本論におけるもうひとつの視点としてM・モースの身体技法をめぐる議論からの援用がある(モース1976)。これはビュシュックという道具や母親の(道具としての)身体による赤ん坊の扱いを文化的文脈や時代的変遷に即して記述するために採用している。このゆりかごに関しては、谷泰が幼児を保持・運搬し、あやし、拘束する等の技法をあつかったエッセイの中でより具体的、発展的に論じており、本報告も個別の文化的背景にもとづき育児道具と身体技法を相互規定的に論ずる氏の発想に触発されている(谷1986)。また、本論ではモースの技法概念を産育儀礼の領域にも拡張して適用している。これは子産み子育ての技法を親の子に対する身体的、道具的働きかけの体系のみならず関連する儀礼的实践も包みこんだ複合的、全体的な文化事象としてとらえようとする意図にもとづいている。産育の技法のなかに日常的な子どもの扱いだけでなくその成長・発達の文化モデルや産育ネットワークの契機を提供する産育の儀礼実践をも含めることにより、ウイグル人の産育の営みを全体的視点にもとづくひとつの文化的過程として把握する道が開かれる。モースの技法概念をこのように広義に展開、解釈することにより全体としての産育過程のなかにビュシュックは位置づけられる。こうした広い視野のなかにビュシュックを置くことで、ビュシュックに備わった道具的側面と意味的側面を同時に論ずることが可能となり、結果的に本論をして単なる産育の民俗慣行の記述をこえたエスニシティ論や文化動態論などより広範な議論へ接続する可能性もひらけると考える。

1. 新疆ウイグルの産育現況

(1) 少数民族の計画出産政策

ウイグル人の産育実践は中国政府による国家的なコントロールのもとに置かれている。中国では全人民を対象に計画出産の政策が実施されており、一般には「一人っ子政策（独生子女政策）」の名称で知られている⁽³⁾。少数民族（地域）に対しても、例外的に優遇措置がとられながらも、基本的には出産の抑制に向けた行政的介入がおこなわれている。ピュシュックの使用を含むウイグル人のローカルな産育実践の把握においては、まずこうしたナショナルなレベルの産育コントロールを無視することはできない。

中国の人口政策の主要な柱は「晩婚、晩産、少生、稀（出産間隔をあける）、優生」であり、その中心をなすのが夫婦の子どもをひとりに制限する「一人っ子政策（独生子女政策）」である。基本的に「一人っ子政策」は法令とさまざまな賞罰制度からなっている。賞罰制度は各種の奨励（優待）と処罰からなり地方ごとの条例によって特典や罰金などの具体的な規定が決められている。法令にはまず「中華人民共和国憲法」（1982）および「中華人民共和国婚姻法」（1980）がある。前者では「国家計画出産を推進して人口の増加を経済社会発展計画に適応させる」ことや「夫婦は双方とも計画出産の義務を負う」などとして計画出産を国家のために人民がはたすべき義務と規定している。後者では結婚年齢や、姓選択、財産相続における男女平等化など一人っ子家庭の拡大を前提にした法的整備が目指されている。（若林2005:124-126）

新疆ウイグル自治区における計画出産の政策は、これらの国家政策の基本枠組みを踏襲しながらも、少数民族地域に共通に適応される例外規定と文化（宗教）問題や政治問題を背景として他の少数民族地域にない特別の規定にもとづき実施されている。具体的には「新疆の婚姻法執行にあたっての補足的規定」（1980）、「新疆少数民族計画出産暫行規定」（1988）、「新疆ウイグル自治区計画出産弁法」（1992）などの下位規定にもとづいて、新疆の少数民族に対する奨励結婚年齢の引き下げ（男子23歳、女子21歳）や戸籍や民族による出生子ども数の緩和措置（都市の少数民族は二子、農民は三子、タジク族や特別辺境地域では四子）がとられている。（若林1996:301）

その後、2001年の「第九届全国代表大会常務委員会第21次会议」において「中華人民共和国婚姻法」の修正が認められ、結婚年齢は、男子22歳、女子20と以前より1歳引き下げられた。この結婚年齢は新疆をはじめ少数民族が集中している地域ではさらに引き下げられ、現在は男子20歳、女子18歳とされている⁽⁴⁾。

中国少数民族人口を研究する黄榮清によるとウイグル族の人口変化はモンゴル族、チベット族等と同じく「高出生、低死亡、高増加」から「低出生、低増加」への転換過程に位置づけられ、出生計画政策期間中のウイグル族の人口増加率は、1982-1990年で平均2.37%、1990-2000年平均1.48%をと低下傾向を示す（黄2006:321）。このほか少数民族の人口変動における特徴としては一部に民族成分変更・通婚による極端な社会増加が見られる点が指摘される。例えば、1982-1990年に満族で90.94%（自然増9.06%）、モンゴル族で64.39%（自然増35.61%）の社会増加が見られたのに対し、

ウイグル族は0%と民族成分変更・通婚による人口増が見られない点が特徴である。同様の傾向はチベット族、朝鮮族、チワン族等にも見出され、背景となる要因としては宗教要因や族内婚のほか満族の歴史的要因などさまざまである。(若林2005:463他)さらに民族単位ではなく地域単位での人口変動を見た場合、新疆ウイグル自治区に関しては、漢族の継続的かつ大量移住による全体人口の増加および人口構成比における漢族の増加が顕著に見られ、同自治区の特殊な歴史的、政治的位置づけがうかがわれる。

(2) ウイグル人の伝統的産育

中国政府の「計画生育」政策が実施されるまで、ウイグル社会では伝統的に早婚や多産の傾向が続いてきた⁽⁵⁾。とりわけ人びとのあいだでは多産であることが強く望まれており、「子どもの多い家庭はバザールのようににぎやかで、子どものいない家庭はマザール（お墓）のように静かである（Balilik oy bazar, balisiz oy mazar）」ということわざにも示されるように子どもがいないことは人生における最大の不幸という考え方が強かった。また墮胎、中絶などは神の意思に反した行為としてタブー視されてきた。

かつてのウイグル人の出産は近隣の産婆の助けを借りて、自宅において「座産」の技法で行われていた。今日、ウイグル人の出産は多くの地域で病院において行われるようになってきている。計画出産政策のもとでの病院出産は、単なる出産の医療化という産育文化の変容や近代化をあらわしているだけでなく、出産の場を病院に一元化することによる出産管理の徹底化も意味している。

また漢族の間の男児選好の傾向はつとに指摘されているが、ウイグル社会においても男児への選好傾向はうかがえる。交易、商業にたけた民族としてのウイグル人にとって、遠隔地あるいは外部への外出が容易な男子は、現金収入をもたらす貴重な役割を果たしていた。その要因としては、イスラームの影響ばかりでなく基層的な社会構造なども推測することができる。例えば、理想的な家族形態としては、男児夫婦との同居志向が語られ、その男児には、特に末っ子が好まれている。「娘は外にまいた水」のようなものという諺は、男児に比べて女兒の家族内での相対的な周辺性を物語るものである。

ただ、現在は、親元を離れたきりなかなか帰ることのない男の子のあり方をさして「男は外にまいた水」との老後の扶養を意識した見解も聞くことができる。一般的に、今の子どもたちは、家庭の経済が許せば進学や就職の時期になると都市部へと出たがり、限られた機会にしか帰らないことも多く、老親たちの嘆きの種となっている。

2. 新疆のビュシュックーカシュガル、ウルムチを中心にー

ビュシュックは新疆ウイグル社会において非常に大きな役割を果たしてきた。例えば、農業中心の地域では、母親は赤ん坊を携帯しやすいビュシュックに寝かせたまま畑に連れて行き、農作業に従事してきた。またビュシュックの床面に筒状に穴が空けられており、大小便は底の受け皿に入る

ため、衛生的かつ経済的な道具でもある。このように以前はウイグル社会で広く使われ、評価も高かったビュシュックであるが、近年その使用範囲が都市と地方において差異や変化を見せつつあり、赤ん坊の身体的形成や人間的形成に対する悪影響を指摘する声も見出される。以下、カシュガル市とウルムチ市を中心に、ビュシュックを使う育児が赤ん坊の成長にどのような影響を及ぼすと考えられているのか人びとの語りにもとづいて報告する。

(1) ビュシュックの道具性と意味作用

産育の技法とは子産み子育てにかかわる手段や技術および知識、観念の複合を指し、そこには生まれて間もない子どもに対する身体あるいは道具を介したかかわり（はたらきかけ）が含まれている。具体的には乳幼児に対する抱く（かかえる）、運ぶ、あやす、固定（拘束）する等の身体技法であり、またさまざまな育児用具を介した技法である。そして、育児用具としてのゆりかごは上記の子どもへのかかわりや母子間の相互作用のさまざまな側面に深く関連しているといえる。先述したようにここでの「技法」の概念はマルセル・モースの身体技法によっている。モースはこの概念によって人間の身体それ自身の道具的側面を強調したが、そこには人間が用いる道具の類に関しても身体との連続（関係）性において捉える視点が含まれていた。

ビュシュックは育児用具のひとつでありウイグル式のゆりかごである。この種のゆりかごは時代や文化を超えてひろく普及しており、谷（1986）のいうところの「幼児の保持・運搬の技法」にかかわる道具である。こうした普及の背景には育児用具としての利便性や必要性が想定され、そこにはいくつかの基本的な機能が見られる。まずゆりかごは屋内外において赤ん坊を寝かせておく入れ物としての役割をもつ。赤ん坊の入れ物としてのゆりかごは赤ん坊自身やその世話に当たる者に対しさらなる機能を派生する。赤ん坊にとってそこは安全と眠りを確保する場であり、世話をする者（主に母親）にとっては育児期間中、自らの自由や休息あるいは仕事に振り向ける時間を確保するための道具となる。また揺ることができる機能がある場合、赤ん坊の睡眠を誘導し興奮を沈静させる役割も果たす。



<保育所でのビュシュック使用(カシュガル)>



<家庭でのビュシュック使用 (カシュガル)>

このようにいくつかの基本的機能から構成されるゆりかごであるが、現実の育児場面では赤ん坊の成長発達や親の養育行動をめぐってさらに多岐にわたる機能や作用がその周囲で観察される。ウイグルのビュシュックの場合もいくつかの特長によって他の一般的なゆりかごにはない利便性や機能を見出すことができる。まずウイグルのビュシュックには揺りかご機能がある。次にビュシュックの携帯性である。ビュシュックはそれ自体持ち運ぶことができる。したがって仕事場（畑）や保育所などにそのまま携帯され、しかも行った先であまり手をかけずに子どもの世話ができる⁽⁶⁾。またウイグルのビュシュックはその中に子どもを固定しておくために、子どもが寝た状態でも排尿・排便の処理ができる工夫がしてあり、親の手間を大幅にはぶくことができる。さらにビュシュックはウイグルの伝統的な産育儀礼のなかに登場し重要な役割をはたす。以上のようにウイグルのビュシュックは育児用具として独自の特徴や機能を備えており、そこでの育児の技法もこれらの特徴や機能に基づいて独自の形態を生み出していると考えられるのである。

さらに付け加えるなら、ビュシュックやその使用がひとつのエスニック・マーカーとして主観的、客観的に捉えられる可能性も指摘できる⁽⁷⁾。ビュシュックには生活用具としての（物質文化の）側面とそこから派生する文化的意味作用の側面があると考えられる。モースは人間の身体それ自身の道具的側面を強調したが、同時に技法に関わる社会性、歴史性、伝達・学習における非言語性についても指摘している。それは文化としての産育技法の特徴を示しているばかりでなく、その使用や放棄などの人びとの生活実践をとおして集団的アイデンティティの問題にも結びついているといえるのだ。

(2) 形状と生産

ウイグルのビュシュックは木製の長さ約1メートル、幅約50センチ、高さ約70センチほどで半円筒形の形状をしている。釘は一本も使われていない。ちょうど1メートルの丸太を縦割りに真半分にした形状とおもえばよい。その凹んだ中央部に布団をしきつめ、赤ん坊を仰向けに横たえる。ビュシュックの本体には、赤、黄、緑、青、金色など鮮やかな彩色がほどこされ、この鮮やかな色は赤ん坊の目に良いと言われている。

ビュシュックの脚部は揺ることができるよう弓形になっており、上部には持ち運んだり揺らしたりするのに使う一本の太い取っ手が付いている。赤ん坊をビュシュックに寝かせ取っ手をもって子守唄（Ellay nakxa：アッライ・ナクシャ）を歌いながらゆする。またこの取っ手は寝かせたままの赤ん坊を他の場所に移動させることを容易にしている。母親が畑や保育所に連れてゆく時、あるいは部屋のなかを移動させる時など取っ手があると便利である。こうした赤ん坊の移動に関しては、後述のswaddling（swaddling）によって赤ん坊自身がビュシュックに固定されその安定が確保されていることが前提になっている。

さらにこの取っ手は母親が赤ん坊に授乳するときや赤ん坊がビュシュックのなかで寝ている間これを覆う綺麗なレースやシルクの天蓋（Yapkuq：ヤップクチ）の支えにもなる。またヤップクチは赤ん坊を蚊や虫から守り、寒い時期には保温の役割もはたす。さらにそれは単に虫除けや保温用と

してだけではなく、時と場合によって赤ん坊（へ）の視線をさえぎる役割も果たす。例えば、赤ん坊が寝ているとき夫婦の性的交渉を見せないようにこれでおおう。行為の後、身体を洗浄（清める）せず、赤ん坊と目をあわせることもタブーである。また、かつては子どもを産めなかった女性がお見舞いに来たときなどに、ヤップクチをかぶせて彼女の視線から赤ん坊を遮る役割もあった。

この他、ウイグルのビュシュックの構造上の大きな特徴として、底の部分に赤ん坊の排泄物を受けるための小型の器（うつわ）が装着されている⁸⁾。赤ん坊の大小便が砂や灰をしいた器にたまり、それを取り外して捨てることが出来るようになっている。ゆりかごの中の赤ん坊は二本の幅広の布ベルトによって身体ごと縛り付けられた状態に置かれる。ゆりかごの中に横たわった赤ん坊のお尻の真下の部分には、布団を貫いて5センチほどの穴が底までつづいており、先の排便受けはその真下にくるようにセットされている。赤ん坊はスワッドリングでゆりかごの中に固定されているので、排便はほかに漏れることなく直接、受け箱に収まる。また小便に関しては赤ん坊の性器に直接、装着する器（Xumek：シュメック）があり、これをとおしてやはり受け皿にみちびかれる仕組みになっている。こうした機能は赤ん坊の身体を清潔に保つとともに排泄物の処理を簡便化し母親の育児の負担を軽減するのに大きく貢献する。

これらのゆりかごは美しい装飾をほどこされ市場（バザール）や店で市販されている。それはまた異世代間で継承されたり兄弟姉妹の間で使い回されることもある。

(3) ビュシュックの生産、流通

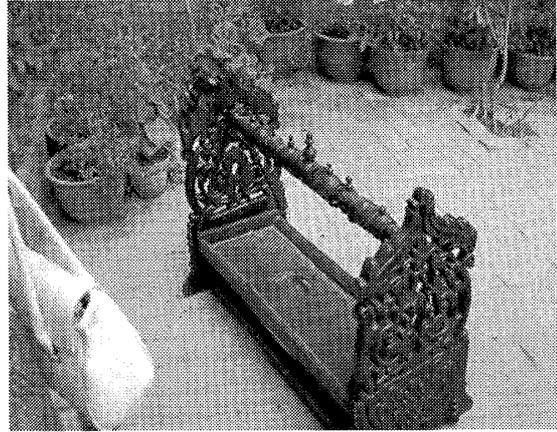
ビュシュックの生産地は広大な新疆の各地に存在している。そのなかでカシュガルはウイグル人の集住地域であり伝統的にビュシュックの生産、供給地となっている。ウルムチのような都市部でもビュシュックといえばカシュガル製のものに人気があり、多くの方はカシュガルからビュシュックを取り寄せている。またカシュガルのビュシュックは地域のあるいは民族の伝統工芸にもなっており、その生産は限られた職人家族によって担われている。

カシュガルのビュシュックは市内近郊のビュシュックチ村（Xamalbak県：シャマルバク県 BuxukqiMahale：ビュシュックチ・マハラ）で製作され新疆の各地域に出荷されている。カシュガルでのビュシュックは特定の製作者たちによって担われており、その中心的役割を担っているのはタワクリ・カディル（Tewekkur Kadir）とその兄である。前者はウイグル伝統工芸の著名な職人として新疆の民間工芸を紹介した書籍『図説新疆民間工芸』（新疆人民出版社2006）にも登場する。それによるとかれらの祖先はおよそ200年も前からイリやカザフスタンなどの地域においてビュシュック製作の名人として知られていた。タワクリ・カディルはその5代目にあたり、現在息子二人が仕事をひきついでいる。彼が作ったビュシュックは、ホータン、ウルムチ、イリなど地域においても人気があり、わざわざ遠くからかれのビュシュックを買いに来たりするという。

タワクリ・カディルの場合、ビュシュックの製作は木材（ポプラの原木）からビュシュックのさまざまな部位を削り出す作業場とそれらを組み立てたり色付けをするための作業場の二ヶ所でおこなわれている。前者は作業場のほか材料となる木を置いたり乾燥させたりするために広い敷地を有



<色塗り作業>



<出来上がったビュシュック>

しているが、後者は自宅兼作業場および自宅続きの倉庫からなる大きな住宅内の敷地である。ここでのビュシュック製作の形態は家内工業的であり、調査当日は夏休み時期ということもあり長男と次男が作業場兼自宅の庭でビュシュックの色塗りを手伝っていた。小さい頃から作業を手伝っており、色付けだけでなくすでにビュシュックの組み立てまで一通りの工程をこなすことができるということだった。道をはさんだ木工作業場のほうでは従業員が雇われて作業にあたっている。ビュシュックは人と材料がそろえばひとつ1時間ほどでつくれる。最初から一人で組み立てるなら一日3個はつくれるという。1985年に機械が導入されて仕事のやり方や速さはずいぶんと変わった。ここで働く従業員は技能の継承あるいは伝承とそれにもとづく生業を前提とする伝統工芸職人というよりも中・短期的な単純技術労働者としての性格が強い。なぜならこれまでに50人近くの従業員がここで作業を学びビュシュック製作を仕事にしていたが、一定期間（2～3年）過ぎると皆ここを出てほかの仕事についている。すなわちビュシュックの製作の家業は今のところタワクリ・カディルの一族以外に広がることはないのだ。

(4) ビュシュックをめぐる子育て言説とその再編

新疆のウイグルを中心に広く使われてきたビュシュックに関しては、その特徴や作り方あるいは素朴な芸術性などについて言及されることは少なからずある。しかし、管見の限りその使用が子どもの身体形成や人間形成にどのような影響を及ぼすかについて言及された資料を目にすることはない⁽⁹⁾。また、これまではウイグル社会で評価が高かったビュシュックは、近年その使用範囲が都市と地方において違いを見せつつあり、赤ん坊の身体的形成や人間形成に対する悪影響もあるという見方も現れている。以下、ビュシュックの功罪に関してそれが未だに常用されているウイグル人集住地域カシュガルとウイグル人が少数派で都市化のすすんだウルムチを例に人びとの語りを紹介してみたい⁽¹⁰⁾。

カシュガル地区は、ウイグル・イスラム文化のシンボリックな地域として知られており、総人口は380万人余りで、その9割が（政府の「民族識別」にもとづく）ウイグル族である。ビュシュック

はこの地域において、市内から僻地の村までくまなく使われている。その使用に関しても赤ん坊の心身の形成に有益であるという考え方が根強く維持されている。ビュシュックの大きな特徴は赤ん坊をそこに寝かせるとき、足や手が動かないように布で作ったベルトで縛ることである（スワッドリング）。手足をしっかりと絞めないとシュメックも動いてしまい、大小便が外に漏れるからだ。今の母親のなかには赤ん坊の手足をきつく締めることを可哀そうに思う者が多い。しかし、年寄りたちには言わせれば「赤ん坊は怒った母親がするように手足をきつく縛って欲しいと望んでいるのだ」という。

地域の幼児の養育習慣に詳しいA幼稚園の副園長は、ビュシュックの効用として以下の3点を挙げていた。1、両手と両足を真直ぐにし、ベルトで固定しているため赤ん坊がO脚などになりにくい。2、難産などで頭の形が整っていない赤ん坊には帽子をかぶせてビュシュックで寝かせることによって、頭の形が次第に丸くなる。3、手足が固定された赤ん坊はぐっすり眠り、健康に成長していく。同様のことはこの地域の農民、ビジネスマン、公務員からも聞かれた。

これに対し最近ではとくにウルムチのような都市部を中心に子どもの心身の発達におけるビュシュックの問題点を指摘する声も出てきている。これまで農業や牧畜を中心とした生活様式のなかで合理的かつ経済的な道具であったビュシュックに対しては、その使用が子どもの身体形成や知的発達にマイナスの影響を与えるという考え方はなかった。ビュシュックの使用については、これまで学問的にも日常的にも人々はあまり関心をもってこなかったといえる。人びとは赤ん坊が生まれたら当然のようにビュシュックを用いて子育てをしてきた。しかし90年代の始め頃から、ウルムチ市をはじめウイグル社会にもグローバル化の波が押し寄せ、各種のメディアなどを通して新しい産育情報や知識が広がっていった。その結果、それまで自明であったウイグルの伝統的習慣や固有の生活用品について人びとが意識的に語りはじめたのだ。

ウルムチ市でもビュシュックに対する積極的な評価は今でも聞かれる。しかし、一方でビュシュックの使用に対する否定的な見方も見出されるようになった。例えば、ウルムチ市在住の30代後半の高学歴の女性の見解にそれをうかがうことができる。B氏は大学の教員であり、長女は13歳、次女は0歳（8ヶ月）。B氏は長女が生まれたときもビュシュックは使わず現在でも使っていない。子どもの手足は自由にさせている。彼女によるとビュシュックを使うと赤ん坊の足が真直ぐになると言われるが、科学的根拠がないという。またシュメックを使うことで寝ている赤ん坊がいつも清潔で衛生的に保たれると言われるが、逆にトイレトレーニングが遅くなるとしてビュシュックの使用を否定的にとらえ、子どもの身体形成や知的発展にもマイナスの影響しかないと言っていた。

ちなみに、ビュシュックを使用することが赤ん坊の身体形成や人間形成に悪影響を及ぼすと考えている人びと（主に高学歴の者）の間には次のような根拠が共有されていた。それによると、90年代の半ばごろスイスの研究者によってビュシュックの使用が子どもの成長に与える悪影響が証明された。そのなかで、1、ビュシュックで赤ん坊の両手足をきつく縛ることは血液の良好な流れを阻害する。2、縛られたままの状態が必要以上に従順な性格形成をうながし主体性のない人間にしてし

まう。3、ビュシュックを横方向に揺らすのは赤ん坊の脳の発達に良くない（縦方向に揺れるのであれば、赤ん坊が子宮にいるときと同じ揺れであり脳に悪影響はない）。以上3点は、インタビューのなかで言及された見解であるが、実際にその研究論文を読んだという者はおらず、筆者も現地で当該論文を探し出すことはできなかった。

出産の医療化が進むにつれ、新しい世代の親たちはウイグルの伝統的な産育技法を継承するだけでなく、妊娠の早い時期から定期的に病院に行き、出産前後に必要な科学的知識を身につけるようになっていく。また経済のグローバル化は近代的・欧米的な育児用品の流入とともに新しい産育知識や技法の拡大にも影響を及ぼしつつある。こうした育児環境の変化は時としてビュシュックの使用をふくめ育児をめぐる世代間の葛藤も引き起こす。

政府関係雑誌の編集員のC氏は、長男が生まれたとき母親に言われ15日目からビュシュックに入れた。しかし、長男はビュシュックに入れるたび一時間以上も泣いていた。昔から男の子をあまり泣かせるのはよくないと言われるので、ビュシュックを使いたくないと母にうったえたところ、母親は子どもは一日で成長するわけではなく、泣きながら成長する（慣れていく）ものだと言った。

また別の家庭においてもビュシュックの使用をめぐる世代間の意見の違いが聞かれた。看護師であるDさんは医学的理由をもとに、子どもをビュシュックに入れることを拒否し、それをきっかけとして学校教員である兄の嫁もビュシュックの使用をやめた⁽¹¹⁾。祖父母は一応これを了解したが、伝統的な産育儀礼は厳密な手順で行なうように言われた。祖父によれば「若い世代の考え方を認めながらの子育てのサポートは重要だが、希薄化するウイグルの伝統的な風俗習慣を子どもたちに伝えていくことも重要である。現代の若者に昔ながらの儀礼に触れる機会をつくって、体験させておかないとウイグル的なものがどんどんなくなっていく。」としてもうひとつの技法（儀礼）の維持の重要性を語った。

産育の技法は新旧あるいは自他間の二者択一ではなく、相互の交渉や調整もおこなわれる。例えば、ビュシュックは使ってもシュメックではなく新しいオムツを使うなど新しい育児用具と従来の育児用具とを適応的に融合させる現象も見られる。また通過儀礼をひとつの産育技法として位置づけるならば、前述の道具としてのビュシュックの放棄と伝統儀礼への固執の例もそうした交渉あるいは調整をあらわしていると考えられる。いずれにせよ、後半のビュシュックの周辺用品のところでも触れるように、近年の新疆への新しい育児用品の流入は、伝統的なビュシュック育児の方法にも大きな影響を与えている⁽¹²⁾。

3. ビュシュックをめぐる「もうひとつの」産育技法—通過儀礼—

産育に関する知識には、日頃の子どもの扱い方や養育態度についての知識ばかりでなく、それらを方向づける根拠となる子どもの発達や存在様式に関する信念（信仰）や認識も含まれる。いわゆるそうした子ども観は、一般に体系化されたかたちで存在するというよりも、日常生活のさまざまな文脈のなかに断片化し散在して存在している。しかし、例外的にこのような子ども観が集約的あ

るいは体系的に提示され、また学習されるひとつの機会として産育をめぐる一連の通過儀礼、すなわち産育儀礼の場面が考えられる。産育儀礼は母子の安全や子どもの無事な成長のための祝いや祈念としてあるばかりでなく、子どもの成長過程についての捉え方や人間形成上の目標を表象したり、場合によってはその実践をとおして産育のネットワーク形成や集団・地域の成員意識をうながしたりもする（坂元2006:91）。儀礼生活の中心的な役割を担うウイグルの女性にとって産育儀礼の実践的知識はビュシュック育児の「もうひとつの技法」といえるだろう。以下、とくにビュシュックに関わる子どもの通過儀礼を取り上げ、ウイグル人の産育技法のもうひとつの側面を見ていくことにしよう。

(1) ビュシュックゲ・セリシュー (Buxukge Selix : ビュシュック入れの儀礼)

赤ん坊のへその緒が治った頃（7日目から9日目）、赤ん坊を初めてビュシュックに入れる儀礼をおこなう。赤ん坊が元気で成長し長生きすること期待して、長寿の婦人にビュシュック・アニス（Buxuk Anisi: ビュシュックの母）を頼み儀式を行なう。ビュシュック・アニスは、準備されたビュシュックを西の方向に置いて、イスラム式の礼拝を済ませた後、以下の順番に沿ってビュシュックの関連用具を備え付けていく。①ビュシュックの底面の穴に排便受けの皿（Kultuk: クルテウック、あるいはJak: ジャック）を装着する。②その周囲に赤ん坊のお尻が痛くないように穴の周囲に15cm四方の小座布団を4つ並べておく。③ビュシュックの底面と同じ大きさのワラなどでつくった固目の敷き布団（Oda: オダ）をひく。その上から再度、上下に分かれた柔らかい綿の敷き布団をしく。④敷き布団の上に上下に分かれた柔らかい綿のおくるみ（Zaka: ザカ）をしく。⑤頭部には、赤ん坊の頭に合わせて枕を置く。⑥以上の準備ができてからビュシュック・アニスが赤ん坊を裸にし、体を撫でて、ゆっくりとビュシュックに入れる。⑦赤ん坊のお尻をクルテウックに合わせシユメックをはめる。⑧両足を真直ぐにして、用意されたおくるみで包み、両膝の上に膝枕（Tizlik: ティズリク）をおいて幅15cm程の布ベルト（Put tartku: プッテイ・タルテウク）で固定する。⑨両手は横に真直ぐにおいて、肘のところに肘枕（Jeyneklik: ジェイネキリック）をおいてもうひとつの布ベルトで固定する。⑩赤ん坊の上にかける布団をかける。⑪赤ん坊が悪い夢を見ないように女の子の頭部に鏡、男の子の頭部に小さいナイフを置き、またビュシュックの上からコズ・モンチャク（Koz munqak）という小石のお守りを下げる。⑫最後に、ビュシュック・アニスがよもぎ（Adrasman: アドラスマン）や干したりんごを燃やした煙をビュシュックの上で9回まわす。これによって赤ん坊についていた悪魔をはらうという。⑬親戚や近所の子どもたちを集めて、インギ・ママ（Ingge mama）⁽¹³⁾の儀礼を行なう。インギ・ママはビュシュックの下から集まった子どもたちにお土産のお菓子をわたす。

(2) キリキ・スイ (Kirki suyi: 40日目の儀礼)

この儀礼は、赤ん坊が生まれて40日目に母子を清めるために経験豊かなキリキ・アニス（Kirki Anisi）を頼んでおこなわれる。姑が呼んできた親族や友人、そして二人の世話をしてくれた女性や

子どもたちが参加する。以前は、40人の7歳未満の子どもたちを集めて行なわれていたが、近年は10人以内の子どもで行なうようになってきている。まずはじめに、赤ん坊の髪の毛を剃って封筒に入れて（布や紙包む人もいる）、ビュシュックの頭部におく。次に、洗いおけに温かい水と塩を少々入れる。その中に赤ん坊のイスラーム意識が強くなるようにモスクの土を、大人しく正直な人になるように小石を、愛嬌のある人になるように氷砂糖を、それから葉っぱや枝などを入れる。女の子の場合は、将来幸せな花嫁になるようにとピアス、指輪、ネックレス、ブレスレットなど金のアクセサリーを入れる。以上の準備の後、経験があり長生きのキリキ・アニスが赤ん坊を洗いおけに入れ、礼拝前の清めの方法と同じように赤ん坊を洗ったあと、子どもたちが一人ひとり色々な願い事を言いながら赤ん坊に水をかける。例えば、幸せになりますように、親孝行になりますように、お金もちになりますように、医者や先生になりますようになど具体的な願い事を言う。その後、赤ん坊をビュシュックに入れ、準備された小さいナン（Tokaq:トカッチ）やお菓子を子どもたちに渡す。

ウルムチなど都市部においては、このような昔ながらの儀礼も簡単に済ますようになってきている。以下に示すのはウルムチのA氏宅で行われたキリキ・スイ（2007年9月12日）の様子である。

A氏と夫2人ともウルムチ出身の30代後半のエリートである。今回はA氏の二回目の出産であるため、実家に帰らず自分の家でこの儀礼を行っていた。参加者は、両方の両親と姑の親族、そして子どもが7人であった。当日は、赤ん坊の父親が朝早く羊を買いに出かけ、買ってきた羊をマンションの前で屠った。その肉を分け、内臓などを片付けたら父親の役目は終わる。儀式の前に、器用で仕事がよくできる女性に赤ん坊の爪を切ってもらうのであるが、今回は赤ん坊の母親自身が爪を切った。その後、赤ん坊の手を鍋などに触れさせ、将来母親と同じように家事ができるようにと祈った。通常、儀式は、赤ん坊の髪の毛を剃ることからはじまるが、今回の儀礼ではそれは省略された。つづいて、赤ん坊の祖母と叔母が大きいボールに温かい水を入れた。その中に、氷砂糖と金のアクセサリーを入れた。父親にモスクの土を取ってくるように頼んでいたようだが、近くに古いモスクがなく土は見つからず、モスクの土は入れなかった。祖母はまた、「本当はアドラスマン（よもぎ）も入れたほうがよかったのだが、用意されていない。今の若者はそういう昔ながらの習慣を面倒くさがりから」と語っていた。祖母が、礼拝前の清めと同じ方法、順番で赤ん坊を清めた。それから、子どもたちが一人ひとり「将来幸せになりますように、医者になりますように、科学者になりますように」などの願いことを言いながらスプーンで赤ん坊に水を掛けた。最後は、祖母が赤ん坊をビュシュックに入れた。ビュシュックは、長女の使ったものを使っていたが、敷き布団などは新しく作ったものだった。当日はシュメックを使っていたが、普段はオムツをよく使っていると母親は話をしていて、赤ん坊をビュシュックに入れた後、インギ・ママを行い、用意された小さいナンやお菓子を子どもたちに配って、式は終わった。祖母が小さい声でアッライ・ナクシャ（Elley nahxa: 子どもを寝かせるときの歌）を歌い、ビュシュックを軽く揺らした。

(3) ビュシュック・トイ（Buxuk toy:ゆりかごの儀礼）—変容と地域性—

ビュシュック・トイは現在キリキ・スイの儀式的部分から分離された祝宴部分を意味するように

なっている。もともとキリキ・スイとビュシュック・トイは妻方においてまとめておこなわれていた。しかし、場合によって（特に都市部が夫婦の生活拠点となっている場合など）夫方でも同じように祝いの宴（ビュシュック・トイ）を準備する。現在、ウルムチ市などの都市部では、女兒と男児1人ずついる家庭ではビュシュック・トイを省略し、男児の割札式（スンナツ・トイ）だけを行なう傾向も見られる。その場合、トイの実施側と参加側のどちらにとっても経済的負担が大きいという理由が上げられる。上で紹介したAさんは儀式としてのキリキ・スイを行ったが大がかりなトイ（祝宴）はしていない。長女の場合も同じように儀式のみ行なったという。その理由として、親戚や友人、同僚はすでに赤ん坊のお見舞いに来てくれその時にお祝いももらっている。またトイをするとさらに経済的な負担をかけてしまうからという説明がなされた。さらに、こうした近年の産育儀礼の再編過程のなかで女兒に対してはグリチャイ（Gulqay）と呼ばれる新しい祝いも創出されつつある⁽¹⁴⁾。

これに対し、西のカシュガルではビュシュック・トイは、男女児ともにおこなわれる。妻の実家でキリキ・スイとビュシュック・トイを同時に行い、その後で実家から子どもとともに夫のもとに帰る昔ながらのやり方を維持している人びとも多い⁽¹⁵⁾。

4. 育児と儀礼における「ビュシュック離れ」

これまで報告してきたように、ウイグル社会における（儀礼を含む）育児技法は日々変化、変容しつつあり、さらに地域的差異をとめないながら複雑な展開を示している。そしてビュシュックをめぐる産育の変化は、人びとの間の「ビュシュック離れ」の現象においてうかがわれる。とくに都市部を中心にビュシュックを育児道具として使用しなくなる傾向が現れつつある。ウルムチで科学的な子育て言説の流布にとめないビュシュックに対する否定的な評価も出現していることは先に述べたとおりである。こうした否定的評価はひとつにはビュシュックが使われてきたウイグル人の伝統的生活様式と今日の都市部の生活様式とのズレに起因していると考えられる。それではこうしたビュシュック離れは具体的にどのように再編されてゆくのだろうか。

ウルムチではビュシュックの代わりに欧米的なベビーベッドが使われるようになってきている。そのなかには電動式のベビーベッドもあり、特に伝統的ビュシュックをめぐる功罪言説とも関連する特徴（タテ揺れ機能）を備えている点で興味深い育児用具である。この電動式ベビーベッドはビュシュックのヨコ揺れ方式が子どもの脳の発達に悪影響を与えるという言説に対してタテ揺れ方式を採用するなど科学的かつ健康的な育児用具であることが強調されている。この他にも1、美しい外観、優れた操作性、2、子守歌の音量調整、揺らす時間の調整、揺れの角度調整機能などの優れた機能、3、赤ん坊の身体に優しい素材の使用、4、精巧かつ実用的、などの特徴が挙げられている。またこの電動式ベビーベッドには「人間の脳の発育の3分の2は幼児期に完成される。子どもを賢く、健やかに成長させるには良好な睡眠、快く響く音楽、快適な揺れが必要となる。電動式ベビーベッドは子どもの身体形成の必要に応じて、安全性と実用性を顧慮して創りあげたものであ



<電動式揺りかご付のベビーベッド>



<手動式揺りかご付きのベビーベッド>

り、赤ん坊の自立性を育つ役割もある現代家庭で欠かせない必需品である。」といった宣伝文句も添えられている。

一方、産育の儀礼的場面でも「ビュシュック離れ」あるいは「ビュシュックと儀礼の分離」がみられる。ビュシュックの存在を前提とした産育の儀礼空間から、ビュシュックの姿が消える傾向が現れている。その典型はキリキ・スイから分離しパーティ式の祝宴として肥大化したビュシュック・トイの現状に示される。本来、ビュシュックを囲んで同時に行われていたキリキ・スイとビュシュック・トイは、儀礼的キリキ・スイと祝宴的ビュシュック・トイに分化しつつある。経済発展とともに人びとの消費活動が活発化するとともにレストランなど借りきって大勢の招待客を招くビュシュック・トイが産育儀礼の中心を占めつつあるのだ。ビュシュック・トイの名称とはうらはらに、そこにビュシュックの姿は見られない。ビュシュックはキリキ・スイなど限定的な儀礼空間にその姿をとどめるにすぎない。

ちなみにカシュガルでは男女児に対し同じようにビュシュック・トイを行うが、ウルムチやハミでは男児は割礼の祝いに一本化し女児にのみビュシュック・トイを実施している（坂元2001）。あるいは女児でもビュシュック・トイを行わない場合や、新しく生み出されたグリチャイという女児の祝いに代える場合もある。そこにはこれらの祝宴にかかる経済的収支を考えた消費都市に生きる人びとの儀礼生活におけるしたたかな戦略を垣間見ることができる。いずれにせよ都市部における子どもの儀礼生活はビュシュックを用いた子育て同様、人びとの経済事情や社会的雰囲気に応じて適宜、取捨選択され再編されており、またその祝宴中心化の流れのなかでビュシュックは限られた儀礼空間へと後退する傾向を見せているように思われる。

5. 伝統的離乳食の持続

ウイグルの育児における変化はビュシュックなどの育児用具にとどまらない。その変化はおむつや子ども服などビュシュックの周辺の用具、用品にも及んでいる。しかし、産育にかかわるすべて

の側面が新しいものに置き換えられているわけではなく、一部では依然、伝統的な技法が維持されている。例えば、赤ん坊に与える離乳食など「食」の習慣にかかわる部分には、近代化やグローバル化に抗して伝統が維持される傾向を見出すことができる。これにはウイグル人の食習慣におけるイスラーム的排他性や厳格な食の規制が関連しているのかもしれない。また、赤ん坊の成長段階や性別の違いによって離乳食の調理法や食材が適宜調整されるようになっており、成長・発達観やジェンダー観と食（品）とを関連させて捉える伝統的な食育観念がうかがわれるのも興味深い。

ウイグル社会では「母乳は粉ミルクや牛乳より栄養がある」などとして育児用品に比べ伝統的な栄養観念や食の価値観が根強く維持されてきた。例えば、子どもには一歳を過ぎる前まで牛乳を飲ませず母乳を用いた。一歳を過ぎない内に牛乳を飲ませると子どもが牛と同じ頑固な性格になってしまうと考えられていたからだ。粉ミルクが流行った時期もあったが、人工的なミルクへの警戒感から長く続かなかった。伝統的な離乳食として、蒸し卵（茶碗蒸しに似た離乳食）や小麦粉でつくるおかゆ：ブルマク（Bulmak）⁽¹⁶⁾がある。これは赤ん坊が生まれて1ヶ月後から3ヶ月間、夜寝る前に食べさせる。4ヶ月を過ぎる頃から羊の骨の出汁をとった小麦麺入りの野菜のスープ（Qop: チョップまたはHolop ax :ホロップ・アシ）、あるいは同じ出汁に米と野菜を入れてつくったスープ（Xoyla: ショユラ）などが与えられる⁽¹⁷⁾。現在はトルコとの合資企業が作っているイスラームの離乳食品が多く出回っているが、多くの人びとは家庭で作る方が新鮮かつ安全であると考えているようである。したがって商品化された離乳食はどちらかというとお祝いや見舞いの時の土産の対象となっており、日常的な食品としてそれほど定着していない。

計画出産の浸透にともないウイグル社会においても都市部などでは「少生、優生」の認識が定着し、収入の高い人びとを中心に子どもの発達と健康を最優先し、最新の育児方法や日本や欧米などの輸入用具を選択する傾向が見られる。しかしながら、子どもや赤ん坊に与える食品に関しては依然、伝統食中心の対応が見出される。他の子育て用品に関しては、値段が高くても近代的・欧米的な商品を選ぶ傾向があるにもかかわらず、食に関しては手間がかかってもウイグルの伝統的な食品の方が栄養的・健康的に優れているという考え方が強く、そこには食の宗教的タブーとの関連も推測される。以上、離乳食など子どもの食慣習をめぐっては当該社会の伝統的な身体観、人間観あるいは成長・発達観や子ども観、アイデンティティ形成などに関わる観念との結びつきが見出されるように思われる⁽¹⁸⁾。

おわりに

本論ではウイグルのビュシュックをモースのいう身体的、道具的技法とそれをめぐる儀礼実践の象徴的技法からなる産育の複合的営みの基点と位置づけ、その使用と選択の現状を集団的アイデンティティ形成（エスニシティ）の問題とも関連させつつ報告した。今回のビュシュックを中心とする視点は、いうまでもなく広範多岐にわたる産育習俗の描出にまとまりを与える便宜にのみとづくものではない。なによりまずウイグルのビュシュックは、スワッドリングをとまなう使用法や構

造において用具それ自体として興味深い対象としてある。またビュシュックの周囲には産育の技術や知識、観念など独自の文化的複合が見出され、それはウイグル人の産育の特徴を理解するうえで格好の対象である。例えば、ビュシュックは育児においてなくてはならない生活用具として普段に用いられるばかりでなく、そのもうひとつの側面である儀礼生活（儀礼的養育）においても重要な役割を与えられており、ウイグル人の全体としての産育の営みに深く埋め込まれた文化的アイテムである。儀礼的養育においては象徴表現（シンボリズム）や実践（プラクティス）を通して当該集団の成員として内面化されるべき規範や価値が明らかにされ、産育の協同関係が確認される。この意味でビュシュックはウイグル人のアイデンティティ形成や人間関係のあり方にも深く結びついた育児用具といえる。さらにそれは民族集団の内外においてはウイグル人の文化的特徴と結びつけて語られるエスニック・クラフトとしても認識されている。

ビュシュックはウイグル人の生活文化のなかでも比較的安定的に持続している育児用具／技法であるけれども、近年の大規模な開発政策や市場経済の流れが加速するなかで都市住民を中心にビュシュック離れや子どもに対する儀礼や祝い事の再編も見出される。一方でウイグル人の集住地域では依然ビュシュックの使用は継承されており、またウルムチのような都市部でも伝統的な離乳食への固執がうかがえる。今日のウイグル社会の産育文化はビュシュックの継承や放棄をはじめ、新旧あるいは自他のさまざまな育児技法によって相互還流的に構成されるプロセスのなかにあると考えられるのだ。

註

- (1) ここで取り上げるビュシュックに関する資料はカシュガル、ウルムチ、トルファン、ハミなどの各地域で1999年と2000年（坂元・他）および2007年（坂元・グリジャナティ）におこなわれた現地調査にもとづくものである。なお成果の一部は坂元（2001）に所収済。
- (2) 本文中のウイグル語の表記はこれをピンインおよびカタカナで表わしたものである。
- (3) 中国の計画出産政策は国家経済社会発展計画のなかに人口計画を組み込み、物質的生産計画と人口の再生産計画のバランスをとるという社会主義国家建設の中核として位置づけられている。（若林1989:48-52）
- (4) 人口计划生育法律文件汇编／<http://www.acla.org.cn> 2007.12.16
- (5) しかし、現在のウイグル社会ではゼロ歳からの保育制度が整っておらず産休も短い場合が多く、仕事をしている母親の間では二人目の子どもを生まない人が増えている。
- (6) これまで新疆では祖父母に子育てを手伝ってもらえない母親は、産休の後、10歳前後の「保姆」（家政婦）を雇い赤ん坊の面倒を見てもらっていた。しかし現在は義務教育が普及しているため、家政婦の役割を果たす子どもを探すことが難しくなっている。このためゼロ歳からの保育制度があまり整備されていないウイグル社会では、働く母親は自分の赤ん坊をビュシュックに入れて個人が自宅で営む私設保育所に預ける場合が多い。その際、赤ん坊を固定できるビュシュックは保育者の負担を軽減している。このように今でもビュシュックの使用は母親や保育者に育児の負担の軽減と安心感をもたらしている。
- (7) ビュシュックはウイグル人の文化項目の一部を構成する伝統工芸であり、その意味においてエスニック・マーカー（民族の文化的標識）としての「可能性」を帯びていると考えられる。新疆の伝統工芸を紹介する最近の書籍でも楽器工芸と同列に紹介されており、その独自の構造や特徴はウイグルの生活文化に興味をよせる部外者にとってきわめて魅力的な物質文化のひとつである。しかし、例えば楽器工芸が対外的にウイグルを語るときの重要なメディアとなり、また観光産業の発展によって土産化もすすんでいるのに対し、ビュシュックは（一部では土産用、玩具用のミニチュアも製作されているものの）今のところ対外的かつ対内的なエスニック・マーカーとして積極的な機能を果たしていないように思われる。伝統工芸という類似の文化特性が他者に対する表示機能においてこのような違いを示すのはいかなる理由によるのか。今後、ビュシュックと伝統楽器に関してそれらがエスニックな意味を持つ社会文化的文脈を念頭において比較検討する必要があるだろう。

ちなみにビュシュックのエスニック・マーカーとしての強い意味作用は産育の儀礼的場面において発揮されるように思われる。もうひとつの産育技法として位置づけた儀礼的養育の場面ではビュシュックが大きな存在感を示している。これは仲間うちに向けられたひとつの対内的意味作用といえる。しかし、都市部における新しい産育用具の浸透を背景とするビュシュック離れの状況や儀礼生活それ自体の流動性は、ビュシュックに託されたエスニックな意味作用の希

薄化をうながす可能性を予感させている。

- (8) カシュガルでは、「ジャック:(Jak)」あるいは「クルテウック:(Kultuk)」と呼ばれ、陶器で作られた小さな鉢が使われる。陶器製の受け皿（鉢）は臭いが付きにくいという理由で広く使われている。ただこれには地域性が見られ、所によっては木製の引き出しタイプのものもある。
- (9) 中国における他の民俗育児への学術的関心としては、伝統的な育児道具や育児技術と子どもの身体形成や知的発達との関係を心理学的に分析した研究がある(呉:1993)。そこでは地域的、民族的に特徴のある産育用具や産育方法が紹介され、例えば、河北、山東あたりの「布袋盛沙」の育児方法、南方の「背巾」や「篓筐」の育児方法、江浙あたりの「木桶」の育児方法、あるいはオロチョン族の「吊床」の育児方法、そして広く中国の広い地域で行われていた「蠟燭包」の育児方法などが取り上げられている。
- (10) ウルムチにおけるビュシュックの使用実態に関するインタビューは、グリジャナティにより出身地域、家庭背景、学歴、職業、年齢層など考慮して行なわれた。
- (11) 理由として男の子にXumek:シュメックを使うと性器にも腎臓にもよくないということであった。
- (12) 新疆ではメディアの普及と国際貿易の急速な発展とともに欧米の育児情報ははじめ海外の育児用品がさかんに流入するようになってきている。このような産育のグローバル化はウイグルの伝統的な子育て技法やその道具にまで影響を及ぼすとともに、商業化、市場化を前提とした産育の格差も生み出しつつある。
- (13) インギ・モマ (Ingge Moma) ともいう。モマはウイグル語でおばあさんの意。この名称は皇宮において天子の世話をするために選ばれた顔立ちが良く人格も優れた女性に由来する。「Mama: ママ」はチュルク語系の言語でも「母」の意味であり、漢語の「妈妈 mā ma」から変異したとはかぎらないという説がある。(現地のウイグル族の民俗学研究者による)
- (14) 伝統的な儀礼の変容や再編のほか新たな儀礼の登場も見られる。近年、ウルムチにおいては男の子の割礼を中心に行なうようになり、女の子の儀式ビュシュック・トイは縮小傾向にある。その代わりにグリチャイ (Gulqay) という新たな儀礼が生まれつつある。グリチャイは、10歳前後の女の子のための儀式であり、主にビュシュック・トイを行なわなかった人びとが行なっている。その由来としてウルムチ市では2つの理由が聞かれた。1つは、祖父母世代がビュシュック・トイが省略されている風潮に不満をもち、生きている間、ウイグルの伝統に従って行なわれる孫のお祝いへの参加を強く望んだ結果であるというもの。もう1つは、女兒だけで男児のいない家庭では、他人の割礼式には数多く参加し出費するにもかかわらず、娘のビュシュック・トイを行なわないままだと経済的な支出のバランスを取り戻すことができないからという理由である。
- (15) もちろんウルムチのような都市部でも、民族の儀礼伝統に固執する人はいる。50代後半の男性E氏は、長年通訳や翻訳の仕事をしており、ウイグル言語文化に詳しいだけでなく漢語漢文

化にも詳しい。妻はサラリーマンで、現在は退職し孫の世話をしている。子育てに関する儀礼は一般的に女性の役割であるが、この家庭では、E氏の強い希望で孫に対しウイグルの通過儀礼を昔ながらのやり方で行なったという。氏は2人の孫のビュシュック入れの儀礼と40日目の儀礼のほか、男の孫の割札式、女の孫のビュシュック・トイをそれぞれ行いビデオにもとった。

- (16) ブルマク (Bulmak) は、子麦粉でつくるスープ類の食品であり、赤ん坊の成長段階または男の子か女の子かの違いによってその水分量を調整する。必要な食材は小麦粉、動物脂肪 (羊)、水。つくり方は、まず数回分の分量の小麦粉を20~30分間蒸し冷やしておく。それから、一回分の量に合わせて、蒸した小麦粉少々を水に入れて弱い火で混ぜながら糊状になるまで煮る。それに羊の脂肪を少し入れて赤ん坊に食べさせる。これは赤ん坊が生まれて1ヶ月後から3ヶ月間にまで夜寝る前に食べさせるウイグルの伝統的離乳食である。
- (17) チョップ (Qop) は小麦粉で、ショユラ (Xoyla) は米でつくる離乳食である。赤ん坊が4ヶ月目になってから一日に一回食べさせる。カルシウムを摂取させるため、どちらの料理も骨付き羊肉 (太ももの骨がよいとされている) から出汁をとってスープをつくる。ショユラをつくる場合は、そのスープにみじん切りのトマト、人参、玉葱を少々入れ、一時間ほど煮込む。その後、米を入れさらに一時間煮込む。男の子に食べさせる場合、骨髓も入れる。チョップをつくる場合は、同じスープをつくり、それにみじん切りのトマト、玉葱、カブを入れて一時間ほど煮込む。小麦粉をこねて、それを薄くのぼし、小さめに切ってスープに入れ、10分ほど煮込む。一歳以内の子どもには以上の伝統的な離乳食を食べさせ、成長にしたがって次第に大人と同じ食品を柔らかめにつくって食べさせる。
- (18) 例えばウイグル社会には生後7日目頃に赤ん坊に初めての食べ物を食べさせるエギズ・エチシ「Egiz eqix:(口を開く)」という儀礼がある。エギズ・エチシでは、礼儀正しく相手を気遣う話し方のできる女性に依頼し赤ん坊に儀礼食を食べさせる。女性はナン、レーズン、クルミを自分でよく噛みそれを赤ん坊の唇に付ける。そうすることで赤ん坊もその女性のように成長することが期待されている。

参考文献

（日本語文献）

黄 栄清

2006「中国の少数民族人口をめぐる」若林敬子『中国 人口問題のいま』ミネルヴァ書房
モース・M

1976『社会学と人類学Ⅱ』（有地了訳）弘文堂

坂元一光

2001「中国新疆ウイグルの産育儀礼とその変容—处理的知識を中心に—」九州大学大学院教育学研究紀要 第3号 平成13年3月, 177-190頁.

2006『アジアの子どもと教育文化—人類学的視角と方法—』九州大学出版会

谷 泰

1986「揺籃の民族誌」小林登他編『新しい子ども学3—子どもとは—』海鳴社
若林敬子

1996『現代中国の人口問題と社会変動』新曜社

2005『中国の人口問題と社会的現実』ミネルヴァ書房

2006『中国 人口問題のいま』ミネルヴァ書房

（中国語文献）

楼 望皓

1996『新疆民俗』新疆人民出版社

韓 連贇／程 万里

2001『新疆民俗風情録—民俗』新疆人民出版社

呉 鳳岡 主編

1993『中国民俗育児研究』中国大百科全書出版会
烏市人口和計画生育委員会 編

2005『人口与え划生育法律法規文件汇编』

韓 連贇 編

2006『図説新疆民間工芸』新疆人民出版社

（ウイグル語文献）

Abdukerim・Rahman／Reweydulla・Hemdulla／Xerip・Huxtar

1996『Uyghur Orup-Adetliri（ウイグル族の習俗）』新疆青少年出版社

On Child-Rearing Folk Customs using *Buxuk* and their Change amongst Uyghur People, Xinjiang China

Ikko SAKAMOTO & Guljennet ANAYTULLA

This paper reports findings of a survey on child-rearing folk customs using the *buxuk* (cradle), and on their new trends, in the Uyghur society of Xinjiang China. The *buxuk* comprises an item in the traditional lifestyle of Uyghur society, and functions as a uniquely Uyghur child-care item for toddlers in the period between birth and a little after age one. We can discover in the Xinjiang Uyghur *buxuk* a structure and characteristics predicated upon the childcare method of swaddling, and, alternatively, ascertain its role as an important tool in child-rearing ceremonies. Examining child-care manners and customs centering around the *buxuk* by using the *buxuk* as a cardinal point, provides one clue from which to not only understand the present reality of Uyghur child-rearing but also from which to grasp the dynamics of culture and ethnicity of China's minority ethnic populations amidst a rapidly changing environment.

Meanwhile, in recent years amidst large-scale development policies and an increasingly market economy, we can find signs especially amongst urban residents of a trend towards "post-*buxuk*" (trends away from use of *buxuk*). However, use of *buxuk* still continues in regions with large concentrations of Uyghur, and even in large metropolis such as Urumqi we can still find persistent use of traditional baby foods. Including selection of whether or not to use the *buxuk*, child-rearing customs in present-day Uyghur society, by both region and generation, present a complicated co-existence of elements of the traditional and the modern, and we propose that Uyghur child-rearing customs are in a continually generative process, a mutual flow between change and continuity.

In summary, the findings of this survey are as follows:

1. The Uyghur *buxuk* possesses a structure and usage characteristics predicated upon swaddling.
2. *Buxuk* is not only a child-care item, but is also given an important place as a tool in child-rearing ceremonies.
3. The representation and internalization of Uyghur norms and values are promoted through the symbolism and practice of child-rearing ceremonies which utilize the *buxuk*.
4. *Buxuk* is also widely recognized as an ethnic craft, and, including ceremonial use, its production and usage are deeply connected to Uyghur identity and the expression of Uyghur culture.
5. Child-rearing using the *buxuk* in present-day Xinjiang exists as a complicated process consisting of not only trends toward post-*buxuk* but also those of parallel existence with and fusion between the *buxuk* and new child-care goods.